

この夏、ノルウェーでマスターズ、スイスで世界選手権が開催された。それぞれの大会における「成功」とは、いったいどういったものだったのか。そして2005年に愛知で開催される世界選手権の「成功」とは、いったい何なのか？

## 90歳にて野山を駆ける

この夏、スイスの世界選手権とノルウェーのマスターズに参加した。

最近多くの競技で行われるようになったマスターズとは、35歳以上の選手権である。もともとオリエンタリングは年齢別カテゴリー制が昔から行われていたから、マスターズといっても普通の大会と大きく異なることはないのだが、やはり世界選手権と名がつけば、選手の意気込みと集まりが違う。何歳だろうが世界チャンピオンになってやろうという野望を持った選手から、自分の力を試してみたいという選手、あるいは往年の友達に会うのが楽しみで毎回参加している選手など、そのモチベーションと参加形態は様々である。

日本からは30人弱が参加した。最高齢は磯谷(いそがや)さん。彼は昨年のマスターズでは85歳以上唯一の参加者として注目を浴びた。今回の全体の最高齢は90歳のエストニア女性。2.4kmほどのコースをなんと4時間かけて回っているのだが、表彰式に現われたすがたを見るとそれもうなずける。表彰台に上るのも、人手が必要なほどなのだ。そういう彼女が、満場の叫びを受け取る様子は、マスターズならではのよさである。

## シモーネ！シモーネ！の熱気

多様な参加者との交歓が楽しめるマスターズに対して、スイスの世界選手権はやはり真剣勝負の場。今回過去最高の41カ国からの参加があった。その分競争は激烈を極め、個人種目のロングとミドルでは日本は、一人の予選通過者を出すこともなく終わった。他方、開催国スイスを見ると、イアン・ソープやエリック・ハイデンをしのぐのではないかとさせる同国のシモーネ・ルーダの活躍で、大いに盛り上がっていた。彼女は前回の世界選手権でもロングのチャンピオンになっており、当然期待が

かかる。街や道路沿いのいたるところに彼女の大寫しのポスターや看板が掲示される中、期待を裏切らず、個人戦3種目で優勝。さらにリレーも優勝の貢献する4冠の偉業を達成した。個人種目が一つだった時期には個人・リレーの金メダルはあるが、4種目になってからは初めてのことであり、シモーネのすばらしさが分かる。今年のスイスは日本を上回る暑さだったせいもあるが、最終日のリレーは押しかけた観客で会場は大いに盛り上がり、熱気にあふれていた。

## 実はピンチだった世界選手権

大会3週間前、実行委員会は悲運に見舞われた。リレー会場であった森とその隣のリザーブが、いずれも局所的な暴風によって倒木だらけとなり利用できなくなったのだ。数キロ離ればそれほどダメージがなかったことを考えると、ヨブ記に匹敵する試練とさえ言える。そして実行委員会はその試練を見事に乗り切った。3週間で併設に利用予定だったトレイルを世界選手権可能なまでの地図にレベルアップし、コースを組み、すべての印刷物を更新し、当日を無事に迎えた。男子2走にあったルートチョイスがありそうでない一見するとつまらないレグに、その苦闘の跡が残されている。このことも含めて、実行委員長のソンケ・バンディクソンに成功おめでとうを言い、いくと、彼はシモーネらの活躍を「ボーナス」だと表現した。

WOC2005にとって、何が「ボーナス」になるかは分からない。日本のオリエンタリング界全体で、そのボーナスを分かち合えるようになりたいものだ。

(村越 真)